平成19年度さきたま講座『考古学で学ぶ動物とのかかわり』

「埼玉古墳群と馬」

鴻巣市立鴻巣中学校　山川　守男 氏

はじめに

1989年、私が発掘調査を担当した深谷市に所在する古墳時代後期の大規模集落跡、城北遺跡から馬歯骨が多量に出土した。この遺跡は深谷市街地をのせる櫛引台地と利根川の中間、利根川支流の福川の自然堤防上に立地する。上武国道建設に先立つ狭長な調査範囲からは、5世紀後半から6世紀中葉にわたる期間に営まれた157軒の竪穴住居跡が検出されたが、馬歯骨はそのうちの6軒から出土した。いずれも解体されたものが廃絶住居の埋没過程で投入されていて、6世紀前葉のものが1軒、6世紀中葉のものが5軒あった。調査当時、埼玉県内で同様な検出例はほとんどなく、この様な事例の解釈をもとめて河内・信濃・上毛野の各地域を対象に資料調査をすすめた。その結果、深谷市周辺の妻沼低地西部は古墳時代における馬の飼養地域であり、埼玉政権下に置かれて経営されていたと想定するにいたった。

1　古墳時代馬飼養地域の特性

古墳時代馬の飼養地域として、文献や考古資料から分析や考察がすすんでいるのは河内地域（生駒山地西麓）、信濃地域（下伊那、善光寺平、佐久平）、上毛野地域（榛名山麓南東麓・北東麓）である。この3地域に共通して見られる要素を整理し、妻沼低地西部の性格を考える基準にしたい。

(1)河内地域

生駒山地西麓の四條畷市周辺は早くから馬歯骨が多数出土する地域として知られ、供伴する製塩土器も馬の飼育に欠かせない塩を得るためのものだったと考えられている。馬歯骨の出土状況は多様で、古墳の石室、古墳群内の土壙、集落内の土壙、祭祀関連の溝等から検出され、5世紀後半から6世紀中葉のものである。蔀屋北遺跡の集落内の土壙からは埋葬された馬の全身骨格が検出されたが、この遺跡では木製輪鐙、製塩土器、韓式系土器も出土している。奈良井遺跡では祭祀遺構を取り巻く溝から板に寝かされた1頭のほか、6頭分の頭部だけが出土しており、ここでも韓式系土器や人形・馬形の土製品をともなっている。早くからこの一帯は『日本書紀』に登場する「河内の馬飼」の中心地として、大王権に不可欠な馬の生産地と考えられており、考古資料との対応が可能な地域でもある。

(2)信濃地域

下伊那の大きな特性は、6つの古墳群で馬を埋葬した土壙が検出されていることである。5世紀後半を中心としたものだが、新井原古墳群ではf字形鏡板付轡や剣菱形杏葉を、また茶柄山古墳群では三環鈴をともなう。この特性に加え、下伊那には5・6世紀を通じて長野県内最多の前方後円墳が築造された地域として注目され、この状況を大和王権と関連させて、王権主導の馬匹生産地としてとらえられている。善光寺平では、積石塚や合掌形石室という渡来系要素をもつ大室古墳群の6世紀代の石室入口部から馬歯が出土し、5世紀中葉の他の古墳からは馬形土製品も出土した。五輪堂遺跡では6世紀中葉の全身骨格をともなう馬埋葬土壙が検出された。佐久平では、塚田古墳群

の7世紀前半の円墳周溝内から馬歯と環状鏡板付轡が出土し、同時期の長峯古墳群では横穴石室内から馬骨が出土している。信濃全域では、馬歯骨の有無に関係なく馬具の出土点数が全国有数であるが、ここから大和王権を支える騎馬兵力、東国舎人の存在が想定されている。『延喜式』によれば信濃国には16か所の御牧が設置されていたが、このうち大室牧は大室古墳群付近に、塩野牧は塚田古墳群・長峯古墳群付近に比定され、古墳時代の馬飼からの発展と考えられている。

(3)上毛野地域

榛名山南東麓では、5世紀後半に築造された豪族居館跡である三ツ寺Ⅰ遺跡と、それに隣接する集落跡である三ツ寺Ⅱ遺跡から馬歯骨が出土している。Ⅰ遺跡は濠の覆土中から、Ⅱ遺跡は4軒の住居の覆土中からで、6世紀前半から後半のものである。分析によれば、Ⅰ遺跡の馬は当時としては大きいとされ、居館居住者の権力に対応するものと考えられている。さらにⅡ遺跡にも馬歯骨が見られることから、馬の管理を通じてⅠ遺跡とかかわりがあったことが想定できる。この近隣には、積石塚の要素をもち金銅製飾履が出土した下芝谷ツ古墳や韓式系土器をもつ遺跡が集中する。剣崎長瀞西遺跡では、積石塚が混じる古墳群内の土壙から5世紀後半の初期の要素をもつ轡を装着した馬骨が出土した。この古墳群に隣接する集落では5世紀代のカマドをもつ住居から韓式系土器が、さらにその中の1軒の貯蔵穴内から1頭分の馬骨が出土している。一方榛名山北東麓では、馬歯骨の出土はないが、榛名山の噴火による軽石層で覆われた6世紀前半の黒井峯・西組の両遺跡から集落内の家畜小屋跡が、また白井遺跡群では放牧を思わせる無数の馬蹄痕が検出され、馬の痕跡が確認されている。これらの遺跡が存在する利根川・吾妻川合流域にも、5世紀後半から6世紀後半にかけて積石塚が造営され空沢遺跡では韓式系土器も出土している。上野国でも信濃国と同様に、『延喜式』によって9か所の御牧の設置が知られているが、このうち利刈牧が白井遺跡群付近に比定されている。このほか、地域と時期はやや離れるが、鏑川流域の長根羽田倉遺跡で7世紀前半の祭祀跡から馬形石製品が多数出土している。馬歯骨の出土は知られていないが、古代の甘楽郡韓級郷の地名などから渡来人の存在が考えられている地域である。

(4)古墳時代馬飼養地域の要素

以上のように、馬歯骨が多数出土して、馬飼養にかかわる可能性の濃厚な河内・信濃・上毛野の3地域では、5世紀後半から7世紀前半までと幅はあるが、つぎのような要素が重複して見られる。

○馬を埋葬したと見られる土壙が集落内や古墳群内に存在し、古墳群内にあるものには馬具が伴うことがある。また、古墳の石室内に馬歯骨が伴うものがある。

○供伴遺物や地域の様相の中に韓式系土器や積石塚などの渡来系要素が見られる。

○同一もしくは周辺の遺跡から馬形の土製品・石製品が出土することがある。

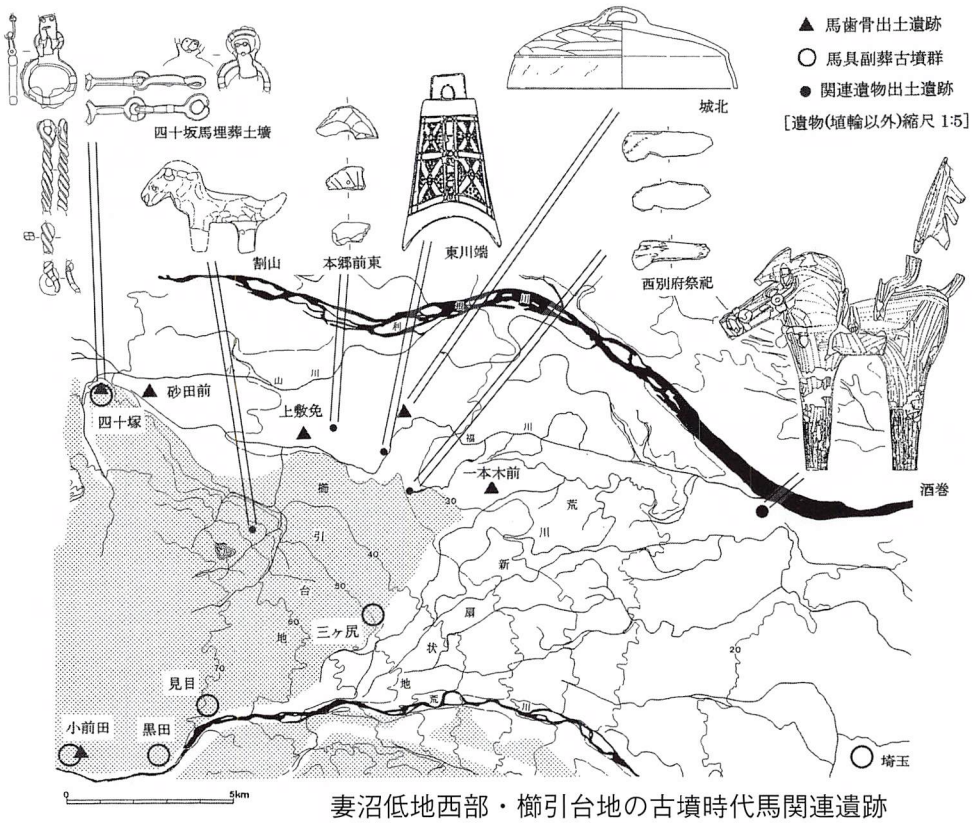
○馬歯骨集中地域の存在意義は、大王権や地域首長権との関係で理解されたり、古代牧の前身としてとらえられる。

2　北武蔵の古墳時代馬とその飼養地域

(1)妻沼低地西部の特性

城北遺跡での馬歯骨検出からはじまった、その解釈をめぐる資料調査であったが、当遺跡の所在する妻沼低地西部では、このほかにも古墳時代馬にかかわるさまざまな考古資料が検出されている。

集落内からの馬歯骨は深谷市砂田前遺跡、同市上敷免遺跡、熊谷市一本木前遺跡から検出されている。砂田前遺跡では6世紀中葉の住居跡の埋土から馬上顎骨が、上敷免遺跡では5世紀後半のカマドから馬歯が、一本木前遺跡では6世紀中葉から後半の住居埋土中や河川流路端から牛馬骨が多数出土している。このように小地域の複数の集落内から牛馬骨が出土する例は他にない。



妻沼低地西部・櫛引台地の古墳時代馬関連遺跡

妻沼低地の自然堤防上やそれを見下ろす南側の櫛引台地の縁辺上には古墳群が存在するが、不明な点が多く、馬具副葬の報告もわずかである。それでも、伝世品や最近の調査で判明したことは当地域の古墳時代馬の実態を考えるうえで興味深いことを示している。櫛引台地北端に位置する深谷市四十塚古墳からは昭和７年の開墾によって鈴付楕円形鏡板付轡・楕円形鏡板付轡・鈴杏葉が出土し、５世紀後葉から末のものと考えられている。この古墳の北側に隣接する四十坂遺跡では10基の円墳跡が調査されたが、径30mと推定される第10号墳の周溝内に掘り込まれた土壙（2.20m ×1.24m) から６世紀末の環状鏡板付轡と鉸具が馬歯とともに出土した。このほか、低地部にある深谷市東川端遺跡の８世紀前半の溝からは馬鐸１点が出土したが、６世紀前葉の製品が伝世ののち投棄されたと考えられる。注目すべきは、四十坂遺跡の馬埋葬土壙であり、時期の差異はあるが、河内・信濃・上毛野のものと同様である。

馬歯骨やそれに装着された馬具が、馬そのものが存在したことを示すのに対して、馬形の土製品・石製品はその形代であるため、馬の存在を証拠づけるものとしての価値は小さい。深谷市割山埴輪窯跡群では、窯内から６世紀前半の土製の馬形が１点、深谷市本郷前東遺跡と熊谷市西別府祭祀遺跡からはそれぞれ７世紀初頭の滑石製の馬形が出土している。これまで見てきたように馬形土製品が奈良井遺跡や大室古墳群から、馬形石製品が長根羽田倉遺跡から出土していることを考えると馬の飼養地域あるいは渡来系の要素の強い地域の共通点と見ることもできる。

渡来人が存在した明白な資料が多数あるわけではないが、城北遺跡からは韓式系土器の要素である環状紐付蓋形土器が出土している。また、この遺跡周辺は律令制下で幡羅郡となるが、郡名が渡来人に由来するという指摘もある。

このように、北武蔵において古墳時代馬にかかわる資料が集中する地域はほかにはない。特に集落内から馬歯骨が出土する状況から、馬飼養の集団がこの地域に存在したと考えたい。

(2)櫛引台地南縁部の特性

1996年の埼玉県内の馬具出土古墳集成では59か所を数えた。この数は信濃や上毛野にまったく及

ばないが、北武蔵という地域の中で整理すると小地域の特性がとらえられる。注目すべきは大里と児玉の両地域で、他地域に比べて馬具出土古墳数が多いことである。その大部分は群集墳を形成する径20mに満たない小円墳であり、馬具の多くは6世紀後葉以降の実用的な環状鏡板付轡である。これに対して、他地域では装飾性の強い馬具が、古墳群の中核となる前方後円墳や大型円墳に5世紀後葉から威儀具的に副葬され、その出土地点が散在して様相は対照的である。

大里地域には最多の19か所（32%）が集中し、そのうち6か所が櫛引台地北縁部、8か所が同台地南縁部、4か所が荒川南岸の比企北丘陵にある。櫛引台地北縁のものは前述の様相でとらえられるが、深谷市および熊谷市の小前田・黒田・見目・三ヶ尻の各古墳群が荒川に面する河岸段丘上に断続的に続く同台地南縁は、段丘の上下とも水田可耕地は十分だったとは考えられず、他の生業として台地上での馬の飼養が考えられる。小前田古墳群の石室内からは馬歯骨も出土している。

(3)埼玉古墳群と馬の飼養地域

埼玉古墳群と城北遺跡とは16kmの隔たりがあるが、ふたつを結びつけたのは妻沼低地を貫流する福川だったと考えられる。福川は東流して利根川に合流するが、この地点には旗指物を持つ馬や筒袖の人物などの渡来系要素を表した埴輪が出土した行田市酒巻古墳群が存在し、埼玉政権との強い関係が感じられる。逆方向の福川最上流部にあるのが四十塚古墳群だが、この中で全長51mという最大規模の前方後円墳である寅稲荷古墳の築造プランは前方部が長く、埼玉古墳群との関連が指摘されている。当時の馬が持つ重要性を考えれば、埼玉政権がこの地域を馬産地として統治していたと考えられる。

一方、櫛引台地南縁部の馬具副葬古墳群と埼玉古墳群とは15km以上離れているが、農業的な生産性の低いこの地域も、荒川を通じて埼玉政権と結びついていたと考えられる。石室構築材としての緑泥片岩、寄居町末野窯産の須恵器、そして櫛引台地上で飼育された馬は埼玉政権の経済に大きくかかわったと考えられる。

おわりに

埼玉古墳群のうち、埋葬主体部からの副葬品が明らかなのは稲荷山古墳と将軍山古墳である。初現期の5世紀末に築造された稲荷山古墳の礫槨からはf字形鏡板付轡、鈴杏葉、三環鈴、雲珠、辻金具、壺鐙などのセットが出土している。また、6世紀後半の将軍山古墳からは、十字文心葉鏡板付轡、鉄製輪鐙、棘葉形杏葉、雲珠、辻金具、鞍金具などのほかに、国内でも類例が稀有な馬冑と蛇行状鉄器も出土した。これにより、地域権力者のもとには最高級品の馬具とそれを装着する優秀な馬が存在したことが明らかであるが、今回はそれを支えた馬飼に視点をおいて論を進めてきた。

従来、馬具は権力者を中心にした下賜・分配の品として研究もすすんできたが、馬そのものも同様の対象物ととらえることができる。北武蔵地域では、埼玉政権が馬の生産管理組織を支配下に置き、下位首長との政治的なつながりの中で馬の下賜もあったことが考えられる。そして、その飼養地域が、これまで見てきたように妻沼低地西部と櫛引台地にあてられるのである。

なお、北武蔵ではこれ以外にも馬の飼養の可能性が考えられる地域があるが、今回はもっとも資料がまとまっている地域で埼玉古墳群との関連を示した。

この講座の内容はつぎの2つの拙稿にもとづいているため、参考文献等はそちらで照合してもらうこととして、ここでは省略する。

山川守男　1992「古墳時代馬小考」『研究紀要』第9号　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

山川守男　1996「北武蔵の古墳時代馬飼養地域」『研究紀要』第12号　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団